令和２年度厚生労働科学研究費補助金　（長寿科学政策研究事業）
アルツハイマー病患者に対する生活行為工程分析に基づいたリハビリテーション介入の標準化に関する研究
分担研究報告書

単身世帯の地域在住認知症患者の生活行為分析の特徴

研究分担者：吉満　浩二（鹿児島大学医歯学域医学系　助教）
研究代表者：田平　隆行（鹿児島大学医歯学域医学系　教授）

研究要旨
目的：本研究では，地域在住認知症高齢者の IADL について生活行為工程分析表（PADA-D）を用いて調べ，独居高齢者の具体的な障害と残存能力を検証する．
方法：対象は，地域在住する認知症高齢者 52 名の内，女性のみのアルツハイマー型認知症患者 38 名とした．独居群は 11 名（平均年齢 85.9±7.1 歳），同居群は 27 名（平均年齢 84.6±7.5 歳）に対して PADA-D の総合，IADL 得点を 2 群間で比較した．さらに各 IADL を工程ごとに自立割合（3 点満点）を算出し，2 群間で比較した．
結果：独居者は同居群と比較し， PADLP-D の総合得点等には差はないが，生活行為別や工程では相違がみられた．1）IADL は「電話」が高く「調理」が低い，2）調理：「配膳」は高く，「献立」は低い，3）電話：「かける」，「かけた相手と話す」は高い，4）洗濯：「干す」，「取り込む」が低い，5）服薬管理：「決まった袋を出す」，「定量を確認する」が高い，6）金銭管理：「現金の扱い」は高い傾向であった．
結論：独居の認知症高齢者の IADL 自立度が高い部分は，各 ADL の工程で異なっており，生活行為全体が高いのではない．独居者の得意な工程を継続させることが重要であり，そのためにも PADA-D のように詳細な ADL の観察・聴取が必要である．

A．研究目的

本邦の 65 歳以上の独居高齢者は全高齢者の 15.5%（女性では 22.4%）であり，2040 年には男性 20.8，女性 24.5%と急増すると予測されている[1]認知症高齢者の単独世帯は，全高齢者の男性 2.8%，女性 9.2%，要介護認定者の中では男性 18.6%，女性 35.6%であり認定者の 3 人に一人が認知症の単独世帯である[2]．IADL に関しては金銭管理や買い物，調理において独居認知症高齢者の自立度が高いが，BADL に関しては同居認知症高齢者の自立度が高い生活行為も多い[2]．一方，地域在住高齢者では独居者と同居者が IADL 自立度に差はないという報告もあり[3]，必ずしも独居者の IADL が高いとは言えない．しかし，独居は社会的孤立を誘発しやすく，心身機能の低下，移動能力低下，不良な健康状態，低い社会経済状況を招きやすい[4]，COVID-19 によってさらにこれらの要因の助長が危惧されている．従って，社会的孤立を防ぐためにも IADL の自立を継続し，社会参加を促す必要がある．しかし，認知症高齢者の IADL の具体的な障害や残存能力は明らかになっていない．

本研究では，地域在住認知症高齢者の IADL について生活行為工程分析表（PADA-D）を用いて調べ，独居高齢者の具体的な障害と残存能力を検証する．

B．研究方法

対象は，地域在住する認知症高齢者 52 名の内，今回は IADL であるため女性のみのアルツハイマー型認知症（AD）患者 38 名とした．リクルートは，2018-2020 年に鹿児島及び宮崎県における通所リハビリテーション，精神科デイケアから抽出した．独居群は 11 名（平均年齢 85.9±7.1 歳，MMSE18.6±3.5），同居群は 27 名（平均年齢 84.6±7.5 歳，MMSE18.1±3.8）であった．生活行為工程分析表（PADA-D）の IADL は，調理，家事（掃除等），買い物，電話，洗濯，外出，服薬管理，金銭管理の 8 行為（1 行為 15 点）をそれぞれ 5 工程（1 工程 3 点）ごとに分類されており，PSMS，IADLS，HADLS に基づいて認知機能的側面から工程分析している．全ての行為，工程について自立割合（それぞれ 15 点，3 点）を算出し，群間で比較検討した．年齢，MMSE，PADA-D の合計点は対応のない T 検定にて統計処理した．その後，各 IADL を工程ごとに自立割合（3 点満点）を算出し，2 群間で比較した．

(倫理的配慮)

鹿児島大学医学部研究倫理員会（170377(370)疫-改 3）の承認を得て行った．

C．研究結果

両群で年齢，MMSE（独居 16.3，同居 15.3），PADA-D 総合得点，IADL 得点には有意差はなかった（図

1)．IADL 別では，調理は同居群が高く，買い物，電話は独居群が高く，金銭・服薬管理，家事（掃除等）は同程度であった（図 2）．工程別では，独居群は，電話の「電話に出る」は同居群と同程度であるが，「電話をかける」，「かけた相手の話す」で自立割合が高かった．買い物では，「入店」，「売り場に行く」，「商品選択」，「袋づめ」では同程度であるが，「支払い」で顕著に高かった．服薬管理では，「服用」は同程度であるが「時間を守る」，「決まった袋を出す」，「定量の確認」で顕著に独居群が高かった． 洗濯では，「洗濯機に入れる」が，金銭管理では「現金の扱い」がそれぞれ高かった．家事（調理・洗濯・買い物以外）では「食事の後片付け」「掃除」が，調理は全ての工程で独居群が低かった（図 3）．

D．考察

独居者は同居群と比較し，IADLs や HADLs，PADLP-D の総合得点等には差はないが，生活行為別や工程では相違がみられた．

1）生活行為は「電話」が高く「調理」が低い傾向．
2）調理：「配膳」は高く，「献立」は低い傾向
3）電話：「かける」，「かけた相手と話す」は高い傾向
4）洗濯：「干す」，「取り込む」が低い傾向
5）服薬管理：「決まった袋を出す」，「定量を確認する」が高い傾向
6）金銭管理：「現金の扱い」は高い傾向

IADL 自立度は独居者が高い[2]とされているが，今回は「電話」のみ差が認められた．独居者であっても介護保険サービスやインフォーマルなサービスも含め人的環境支援によって在宅生活を継続している高齢者も少なくない．逆に同居者においても役割として担っているケースも多い．従って，IADL の自立度は独居以外の居住環境（人的・物理的）が影響している可能性がある．

PADA-D の工程についても独居／同居で自立割合に相違があった．家族介護者やサービス担当者は，本人の残存能力を活かして「できる」部分は継続支援を，困難な部分は最小介助でできるよう支援していくことが重要であると考える．

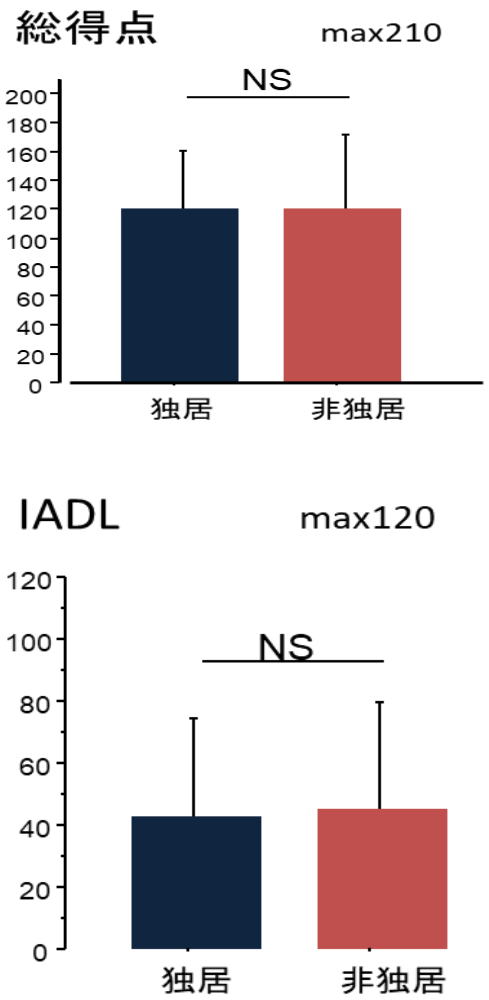


図 1．PADA-D 総合得点，IADL 得点の群間比較
NS: Not Significant

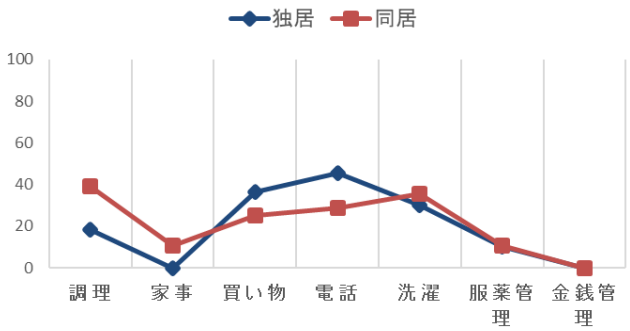
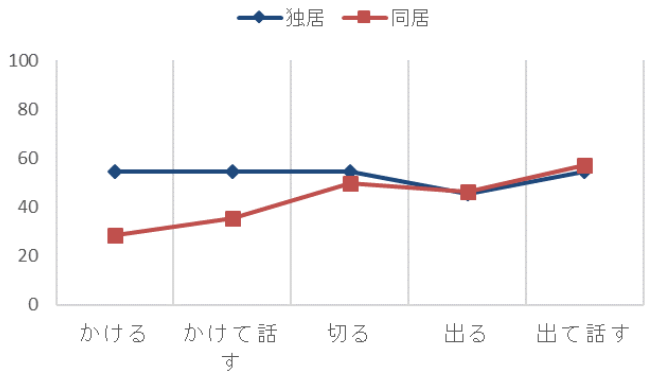
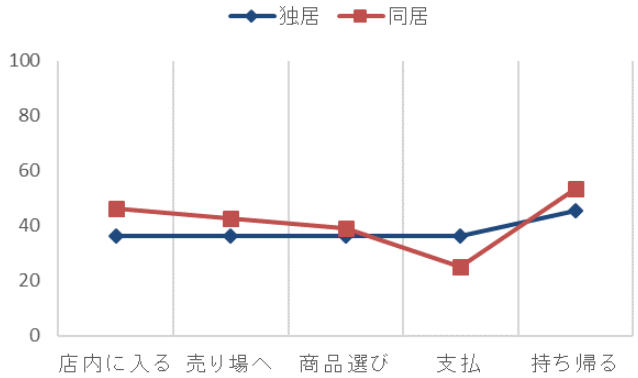


図 2．IADL 別 PADA-D 自立割合の群間比較

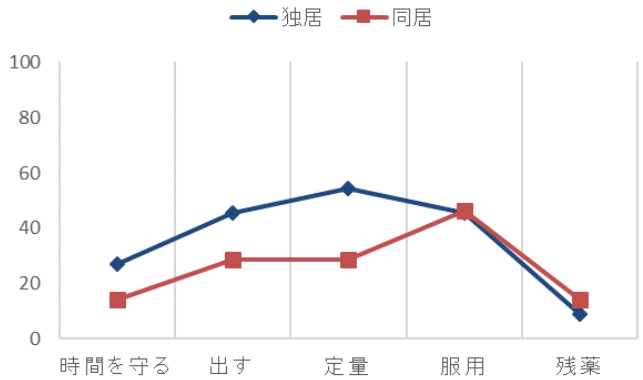
電話



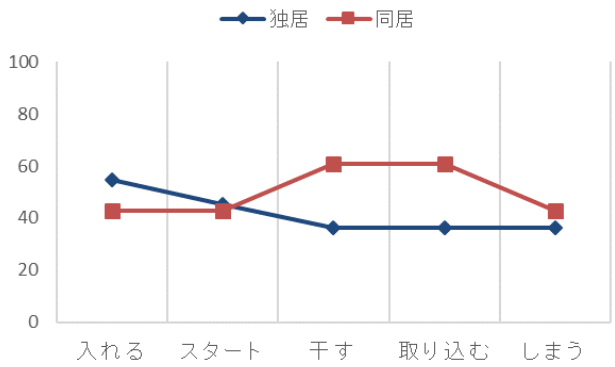
買い物



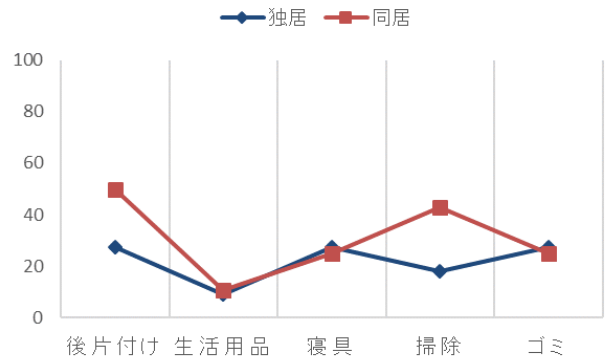
服薬管理



洗濯



家事



調理

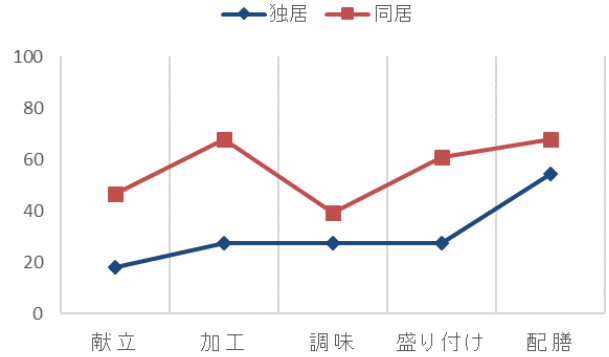


図 3．各 IADL の工程別自立割合の群間比較

E．結論

独居の認知症高齢者の IADL 自立度が高いのは，各 ADL の工程で異なっており，行為全体が高いのではない．独居者の得意な工程を継続させることが重要であり，そのためにも PADA-D のように詳細な ADL の観察・聴取が必要である．

【文献】

1）国立社会保障・人口問題研究所：日本の世帯数の招待推計（2018 年推計）．http://www.ipss.go.jp/pp-pjsetai/j/hpjp2019/t-page.asp

2）川越雅弘，南拓磨：一人暮らしの認知症高齢者の出現率及び生活状況の実態．老年精神医学雑誌 31（5），460-459．2020

3）赤嶺伊都子，新城正紀：世帯形態からみた地域在住高齢者の支援-単独世帯に焦点をあてて-．民族衛生 72(5): 191-207, 2006.

4）粟田主一：一人暮らし，認知症，社会的孤立．老年精神医学雑誌 31（5），451-466．2020

F．研究発表

1.論文発表

・Tanaka H, Umeda R, Shoumura Y, Kurogi T, Nagata Y, Ishimaru D, Yoshimitsu K, Tabira T, Ishii R,

Nishikawa T. Development of an assessment scale for engagement in activities for patients with moderate to severe dementia. Psychogeriatrics. 2021 May;21(3):368-377.

・吉満孝二，浜田利満，藤田賢太郎，西綾，福永一喜，認知症高齢者とのコミュニケーションを支援する表情解析技術の検討．日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌 18(1): 100-108, 2020.

・吉満孝二，千種芳幸，平嶋佑太郎，丸田道雄: 貯痰時に副雑音に含まれる特徴量の解析.鹿児島大学医学部保健学科紀要30（1）: 9–14, 2020.

・下木原俊，丸田道雄，吉満孝二，徳田圭一郎，上城健司，西田征治，磯直樹，内田淳，福永一喜，椿野由佳，村島久美子，河合昌子，田平隆行,医療・介護施設における徘徊行動とその支援についての実態調査．日本作業療法研究学会雑誌 23(1):9-16, 2020

2.学会発表

・藤田賢太郎，吉満孝二，福永一喜，田中有貴，青木孝之，浜田利満，台所の火事インシデントを防ぐ介護ロボットの開発について，第 54 回日本作業療法学会, 2020 年 9 月（新潟/WEB）

・吉満孝二，藤田賢太郎，福永一喜，坂下寛志，平嶋佑太郎．在宅高齢者のリスク管理に関する調査 -介護ロボットのニーズ調査として-．第 54 回日本作業療法学会, 2020 年 9 月（新潟/WEB）

G.知的財産権の出願・登録情報

なし